

# 真生

第三卷 第六月 號

未だ一度も見たり聞いたりしたことも味つたこともない者をた  
し、眞なる又聞きや想像で之を知るといふことはできない。も  
ある。之を知らうとするならば自分自身に之を経験すべきで  
然るに世間の多くの人は自分でこの経験をしやうとしない。で  
多くは單なる人の話や讀書によつて之を知らうとすることは  
殊に目に見ることも、手に觸れることも、又香いたり聞いたり  
するに知らうとすることは、而かも人の言葉や想像によつ  
て之を知らうとすることは、而かも人の言葉や想像によつ  
然るに宗教信仰は全く如來と自分との直接経験である。従つて  
宗教の事實は自分自身の體驗の外には人にも知れず、又人か  
ら聞かれない。一度過ぎた後から之を考へたり想像したりして  
も、それは眞實の宗教ではない。それは己に過去の経験に過  
といつても、一度過ぎた後から之を考へたり想像したりして  
も、それは眞實の宗教ではない。それは己に過去の経験に過  
ぎないものである。眞實の宗教ではない。それは己に過去の経験に過  
だから、一切の之等の概念や、又いつも現在に生きやうと思ふ  
の當體に於て、如來と自分と常に離れない信仰の體驗に住せ  
ねばならぬ。宗教はどこまでも、自分自身の直接経験の事實である。従つ  
て本を讀んだり、人から聞いたたり、又考へ出さうとして得ら  
るべきものではない。どこまでも一切の概念や模倣を離れて  
眞實の體驗に入るべきである。（念）

眞生

—

佛に觸れるまで 尅子

|                       |      |
|-----------------------|------|
| 佛に觸れるまで               | 尅子   |
| 至誠心に就 <sup>て</sup> 反省 | 土屋觀道 |
| 眞劔な心から                | 撫象子  |
| 念佛の現世利益               | 眞野觀光 |
| 如來の大力                 | 善之進  |
| 北越より                  | 原吉郎  |
| 吾朋便り                  |      |

一辨護人の無罪行為に對し、檢事は懲役五年を求刑いたしました。此れに對し、判事は懲役一年に判決したと主張いたします。其場合此等三人は一つ法律を堅いとして三様に判斷せう。其場合合此等は一人は一つ法律をす。何と云ふ曖昧な事である。性質のものなるに至つて、その法律も直ちに變更され得る性質のものである。嚴密な意味に於て實に飽きたらぬ次第でせう。道德も其通りです。道德も法の便利法に過ぎぬ。眞に社會幸福を目的として割り出した一つの力は、アラトーンにも云つた如く社會を動かしてゆく力である。國法的には罪となし、社會以上國家の力を動かしてゆく力を中心を發見した者には身は十字架に依て葬られて居られぬ。生命となつてゐた主張は終に後世を率ひて、高き國家より正しき道德法律を産んであるではありませんか。單なる常識生活に甘せられず、斯かる世間生活を根本から導いてゆく大中心生命を得んとする姿が宗教です。

□

宗教に入り、自ら宗教人となるや、初めて道德や法律をより高き一點より導き、宗教人となるや、初めて道德や法律をより代を啓く者は時代に居るを生かしてゆく事が出来る。新時代をして居るものは、先づ常居ればこそ顧みず、不滿の出して居るもの事です。一步先へ踏み出さなければならぬ。世界に足踏み込んで来る者に、教育も政治も經濟も宗教の點を創造して行く事がある。それをも現在の道德教育政策にして行く事に思居るの、愚も亦甚だしといふ可きで者かのやうに思居るのは、愚も亦甚だしといふ可きでせう。

(冠)

## 至誠心に就ての反省

土屋 觀道

私は近頃の多くの念佛信者を見て、之では困ると思ふことの甚だ多いことを感せずにはならぬ一人である。之でもほんとうに眞の如來が信せられてゐるのであらうか、若し眞に少しでも如來が信せられ、又眞に少しでも念佛が出るならば今少しは自己の行爲に對しても、幾分の反省はあるべきでないか。自分勝手に思ひ定めた自己安心で如來の本願に一致しないでは決して往生するものではない。信仰なきもの、念佛が何で往生の業因となり得やう。如來を僞り自己を僞はる行爲では決して往生は不可能である。然に今時の信者にして眞に如來を信じ、念佛を信じて眞に往生を願ふ者が幾人であらうか。

斯くいへば或る人は云ふかも知れぬ。「どうしてそんなばかなことを云ふのであるか、己に經典にも申せば生ると書いてあり、善導法然の二聖の如きも、申せば生るとあるではないか、それを何にかと難くせをつけて、反て正直な人々を迷はすといふことはとてもないたはごとである」と、然乍らかく云へばとて決して私は徒に念佛信者を批難して、獨りで、其の快を貪らうとするものではない。否それどころか、反て眞に心より道を愛すればこそ、其の友をして、未だ至らざる所を反省せしめて、更に眞實の念佛に入らしめんが爲めに外ならぬ。

それはともかくとして、今時の念佛信者にして、果して幾人が眞に如來を信じ、念佛を信じて、僞りなく淨土に往生しうる人があるであらうか。又自らに如來を信じ、念佛を信じて、まことに往生をとげ

たいと思つてゐる人にして、果して幾人が眞に如來の本願に乗する人があるであらうか、靜かに思へば疑いなき能はずである。

かく言へば又或る人は言ふかも知れぬ、「現に念佛を申てゐるのが即ち往生を願つてゐる證據ではないか、又たとい一口でも念佛が申せるといふことは己に如來を信じてゐる證據ではないかと、乍然世には泣けども涙なき鳥あるが如く、口に稱名しながらも心に信仰のない人が無いとは限らぬ。世にはまことに如來を信するでもなく、又心より往生をよめたいとの願ひもなくして、そこに何等の反省もなく、たゞ從來の形式習慣に捕はれたまゝで、念佛申す人々が決して無いとは限らぬのである。而も現に一人でもかゝる誤信者がありうる以上、只申しさへすればそれでよいとしてすまざるべきものではない。殊に心から眞實に道友を愛し、又眞に心から一人でも眞實の念佛に入らしめたいとの希願ある限り、其の誤まりをたゞさんとすることは、決して私共の怠つてはならない所のものである。されば己に善導法然の二聖の如きもこの往生の爲めの念佛には稱名を以つて本願となし、申せば生るとはすゝめていられるが其の申す念佛に對する安心の定めかたには特にいと深き注意と反省とを促されてゐるのである。然に世人はやゝともすれば此の深意を知らず、ともすれば其の一方のみに傾いて念佛申すことを自力かの如く誤るものがあるかと思へば、又一方には全く之に反してたゞ申せば生るゝの一方のみに傾いて、口先ばかりの稱名で何等少しの反省もない人までも、恰も眞實の信仰者でもあるかの如き口ぶりで之を辨護するといふことは決して正當なやり方ではない。否反て少しく道を求むる人々には到底黙止し難いこと柄である。而も一概に「念佛申さへすれば往生ができる」との言を楯にして、此の深意ある先覺者の訓戒

を無視すると云ふが如きは最も愚かなる人の仕方といはねばならぬ。

それに又、論者の云ふが如く只だ「念佛申しさへすれば如何なる場合にも往生ができるもの」ならば何でわづらはしくも「念佛には必ず三心を具せねばならぬ」とか「若し三心の中、一心でも缺けては決して往生することはできない」など、殊更に善導や法然の先覺者が注意せらるる必要があらう。之を以て之を見るも、所謂多くの念佛者中に、ともすれば三心を具せない念佛者がありうると云ふことを知るべきである。而て私共が念佛信仰の反省をなすといふことは決して徒勞に屬することではないのである。殊に導師の三心釋を拜すれば如何に其の三心の必要の念佛に缺くべからざるものであるか、一層明かに判るであらう。

導師は至誠心に就て「至とは眞なり、誠とは實なり」といつて眞實の心を至誠心であるといはれてゐる。而も一切衆生の身口意の三業は此の眞實心中になすべきことを明かして「外に賢善精進の相を現じ内に虚假を懷くことを得ざれ」と戒め、貪瞋邪偽奸詐百端にして、惡性止めがたく、事蛇蝎に同じきは三業を起すと雖も、名づけて雜毒の善となす。又虚假の行と名づく、眞實の行と名づけず、若しかくの如きの安心起行をなすものはたとい身心を苦勵して、日夜十二時急に走り急に作すこと頭然をすくう如くなるも、すべて雜毒の行と名づく、此の雜毒の行を廻して彼の佛の淨土に生れんと欲せばこれ必ず不可なり」と虚假の心を攻めてゐる。之を以てこれを見れば、如何に念佛の行者が至誠心の缺ぐべからざるかを強く知ることができるであらう。然に今時の信者にして、果して幾人かこの至誠心を具して、念佛申す人があるであらうか、靜に思へば私共は此の法語を聞くにつけても、自ら慊愧なき能はずではないか。

導師は更に一步を進めて、「又眞實に二種あり、一には自利眞實、二には自他眞實なり、自利眞實といふは又二種あり、一には眞實心中に自他の諸惡及び穢國等を制捨し、行住坐臥に、一切の菩薩の諸惡を制捨し給ふに同じく、我も亦かれの如くにならんと思ふなり」と示されてゐる。次に「二には眞實心中に自他凡聖等の善を勤修す、(略)又不善の三業をば必ず眞實心中に捨て、又もし善の三業を起さば必ず須らく眞實心中になすべし」とこれが所謂導師の至誠心の相である。さればこの迹を受られし聖法然が亦此の一文を選擇集に引證して「引く所の三心はこれ行者の至要なり、故いかんとなれば經には則には則ちも三心を具するものは必ず彼國に生ずといふ、明に知りぬ三心を具するものは生ずることを得べしと釋し一心をも缺けぬれば又不可なることを」と之明かに上人が念佛信者に對する三心の必要なる教への一であつて。而も宗祖が「三心は之行者の至要なり(略)三心の中その一心をも缺けぬれば之又不可なり」と文を殊更に引れしは如何に私共の爲めにいと深き教訓を垂れ給ひしかを知るべきである。従つて、眞に念佛申す人々に如何に至誠心が必要であるかを知るべきである。然るに今時の念佛信者にして果して幾人か眞に此の至誠心を解したる人があるであらうか。「行住坐臥に一切の菩薩が諸惡を制捨し給ふに同じく、我も亦かくの如くならんと思ふなり」との眞實心こそ眞に念佛者の正に具すべき至誠心であるのに、果して今時の信者に此の覺悟ありや否や、私には疑ひなき能はずである。又「罪は十惡五逆の衆生も生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」との宗祖の法語を眞に心から拜讀するものが幾人であらうか。靜に思へば寧ろ至嘆の極みである。而も導師の「此の雜毒の行を廻して彼の佛の淨土に生せんと欲せばこれ必ず不可なり」との言葉と「小罪をも犯さじと思ふべし」との宗祖の法語は全く一致するではない。然に今時の念佛者にして果して幾人かこの信仰ありうや。或る人は「かゝる至誠心は自力聖道の至誠心であつて、他力易行の至誠心ではない。罪惡生死の凡夫にはそんな至誠心が起りうるものではない」

と云ふかも知れぬ。乍然この心なくしてどうして、淨土に往生したいなどの心が起りうるであらうか。第一に淨土に往生したいと云ふ心が起りうるものが即ち諸佛菩薩に同じからんとするの心があるからではないか。罪を犯しながら其の心を止めたいとも思はないやうなものがどうして眞の淨土に往生したいなどと願ふ心が起り得やう。どう考へても眞に往生したいとの心願はむしろ「諸菩薩が身口意の三業に於て一切の諸惡を制捨し又一切の諸善を勤修し給ふが如く、我もこれに同じからん」との願ひからこそ眞に起つて來るのである。然らば此の眞實の心なくしてどうしてまことの念佛が申されやう。乍然斯く云ふものゝ今日の信者が悉く無信仰であると言ふのではないが殆ど十中の八九までがみな悉くかくの如きの念佛者であると云ふことが此の上もない悲しみである。

然乍ら今時の念佛者の殆んど悉くが眞實の念佛者であるといふことであるならば幸いである。けれども眞に「小罪をも犯さじと思ふべし」との宗祖の法語を心から守つてゐる人が幾人であらうか。私にはどうしても疑いなきを得ないのである。然るに「小罪をも犯さじ」との心も起さず、反て「貪瞋邪偽奸詐百端にして、惡性やめ難く事蛇蝎の如き人々がこのまゝで往生を乞ふこと寧ろ笑止の限りではないか」「如何なる場合にも自己の行爲をして諸菩薩に等しからしめん」との念願あつてこそ、初て眞に淨土にも往生したいとの至誠心となる。さればまことに至誠心とは即ち眞實の心であつて、佛にも等しからんとするの覺悟であらねばならぬ。從て導師が特に「三心の中、一心をも缺けぬれば必ず不可なり」と戒められたのも亦この心であつた。而も之こそ亦眞に道を求むる人々の正に具すべき心である。されば我が師辨榮上人も「如何なる場合にもうはしきをかへざることを誓ひたてまつる」と誓ひの祈りを示されてゐるではないか、然ば今時の念佛者よ、吾人は今一層に深くこの言に鑑みて更に至誠心の反省を要すべき秋である。(五二〇)

## 眞劍な心から

撫象子

(一)

「香世子さま。貴女何麼覺召して！近頃の婦人讀書界は二三年以來宗教的方面にも随分繁昌ですね。けれど何れを拜見致しまして本當に心から頷ぐ事の出来る様な物がありませんのね。かなり一流の方でも要するに獨斷的理想論かさも無ければ第二義的な人生論であつて私達の魂の満足に關しては丸で没交渉で些しも響かないではありませんか」しどやかな而して何處か高潔な趣きの見ゆる道子夫人は平素に似合無い程のかなり峻烈な口調で其深みある美しい眼を擧げて此折節頻りに道を求めて居る若い婦人記者の香世子に話し掛けた。

九卓の青羅紗の上に浮き上がった様なイタリヤ陶器の花瓶。それにわざとらしくからず投げ入れられた可憐な勿忘草の萌たげなるも奥ゆかしさの一つである。

「奥様。私ね。此頃は雑誌にスツカリ見限られて仕舞ましたの。尤も時々は二三拜見させては頂きますが、時代思潮の宗教物も畢竟は烏おごしの空論ですし、あの理想の低劣な體驗談などは一種の雜誌政策とは云へばほんとに嫌になつて仕舞ますわ。ですが一般高級雑誌にしましても多くは概念論でまあ似たりよつたり何麼もビツタリしませんの！で色々な方々の御講演も伺つて見ました。無論四返も五返も聞込まねば一概に批評し去る事は出来ませんけれども。だげ本當に嫌になつて仕舞ますわ。有名な牧師様や名高い布教師様などの所謂教役者流は云はすもがな。随分信仰を賣物にして居るイカサマもありますとか云ふ事ですし、と云つて博士様や僧正様の御話はとても私達のやうな異端者には共鳴が出来ませんしね。また賣出しの實際家様達だつて事實はむしろ純な分子を失つてゐますからね」

「全くよ、然し貴女も随分革命家ね。本當に概念論で落着く事の出来ない現在に於ては到底從來の教祖主義や經典主義の宗教にはごなたもあきたら

ないのは全く無理もない事の様に思ひますわ。祖師に依らねば信仰が成り立たない様でも困まるし、經典や祖語に無ければ一も二もなく排斥しやうとする排他的教權主義でも困りますわ。頑固な保守主義はモウ時代の潮流に逆行して居るさへ云はれて居るではありませんか。何も新しがる必要はありませんが、せめては一般社會人心の推移する處を眺め得る丈の眼は欲しいと思ひますの。無論今迄の宗教だつて人生其物を無視しては居ません。矢張人生を認識し評價し救済し改善し完成しやうとして居ます。けれども教祖の型に依り經典の外形に固守せんとする處に私達の人生を如實に眺めて呉れません。即ち私達を社會組織の環境から抽象して考へて居る處にあの人達の本質的矛盾があるのではありませんでせうかと考へます。私達の人生は抽象ではありません。事實です。此の現實です。實に此の不平は最早一般的になつて居るのです。實際私達は意識的にも無意識的にも健全にして完全なる新宗教の出現を待つて居るので此氣分はひとり日本のみならず世界全體

「奥様。私も今ま其問題で悩んで居ますのよ。ね奥様。どうしたら私自身の徹底が計られるでせう？」

「香世子様。あなたの仰しやる其徹底と云ふ事はどう云ふ内容なの。私にも經驗があるのでこんな事をわざと伺つて見ますの。一體ね言葉の持つ内容を勝手に考へて置いて夫を望んだり或は間違つて覺え込んだ爲めに出来難い事を要求したりしてゐる事が随分多いと思ひますの！私達は今迄に色々の宗教的の言葉を覺えました。然し夫はかなり私達を人間其物に満足せしむる事の理解から遠ざけました。之は悲しい事ですけれども亦た一面に求道の過程として避ける事の出来ない事かも知れません。本當に多くの人達は先入主となつて居る幾多の思想にこの位禍ひされて居ますのでせう。私、今ま振返つて見ますと今迄私達の考へて居ました信仰は一種の執着ではないかと思ひます。また私達の知つて居る宗教は唯だ一種の生活苦に對する避難所見たいな物と位丈ではなかつたでせうか。さもなければ經濟を無視した道德教と

にみなぎつて居ると云ふ事ではありませんか」  
感激に満ちた火の様な熱辯がどうして出るかどむしろ其元氣さに驚歎の眼を見張つた香世子は今更乍ら信仰の力の偉大さを考へさせられるのである。

「まあ、奥様の御元氣なこと！私。奥様の仰しやる事には何時も共鳴しますのよ。本當に其御元氣と云ひ御熱心と云ひ本當に羨ましく御座いますわ。御色艶も生き生きとして御丈夫相でもあるし而して常に御喜びに充ちて居らつしやるし、其上御識見の高遠該博なるには、心から引付けられて仕舞ますの！先日或方に伺ひましたら、已前には夫れは夫れは御痛々しい程に御瘠せになつて居らしたつたのが、或る信仰を得られてからスツカリ御見違する様におなりになつたとやら承りましたが、本當に見るからに御氣分が晴れ晴れと遊ばして居らつしやいますわ」

「さう、そんなに見えて。けれど私、唯だ今は人間としての眞實に自らを生かさうとしてゐる丈なのよ」

か若しくは功利的な低い幸福を夢想する現世教や現在生活を忘れて未來に計りあがれをもつ未來教やなどを知つて居る丈なのでせう。是れ皆な言葉の禍です。否な言葉を無難作に取扱つた既成宗教の信奉者や教役者が半分は其責任を持たねばならぬかと思ひます。で今の徹底と云ふ言葉も徹底と云ふ事實がどう云ふ状態に實現し得らるべきか云ひかへると人生の如何なる状態が徹底生活と云はるべきかを考察して夫を人にも質し自らも研究しなければ、若しかすると間違つた意味に思つて居ないにも限らぬと思ひます」

夫人はかう云ひ乍ら其落着いた顔を擧げて外の碧い空の色をデット見据わした。

理智的な怜悯と優美な感情とに富んだ香世子は唾を呑んで

「……………」  
だまつて目をみはつた。而して熱心に次の言葉を待つた。

(續)



## 念佛と現世利益

愛知光明會員 眞野 觀光

## 念佛と長壽

『長命はたゞはたらくにしくはなし流るゝ水の腐らぬを見よ』とは誰れかの歌であります。歌の眞意を考へて見ますれば運動すれば新陳代謝が行はれるから従て病がない心機一轉の機會も多いから氣病もしないと言ふことに歸着するかと思はれます。念佛は只唱ふるのみにても腹部、肺、咽喉舌脣、攝嚥部等を運動さす利益がある様に思はれます。念佛弘通の聖師、法然、見眞の兩大師が八十乃至九十の長命を保たれたるを初めとし念佛者の長命なるもの所在に見受けるのであります。長命なるが故に念佛者となつたであらふと思ふ人もありませふけれども兩大師などは三十乃至四十から行往坐臥の念佛者であります。前掲各機關の運動が無病ならしむると共に一面に絶大の他力を得て安心立命する事の精神を慰め歡喜勇躍の境地に入り娑婆即寂光土となりて何を見ても樂もしく

生死即涅槃煩惱即菩提と觀得るに至れば従て身神を健康ならしむるは申すまでもないことであります。

## 念佛と社交

人は社交の動物でありますから友は得たいものであります。さりとて酒食の友はあまり好ましくない、風流の友も信仰が違へば何んとかく心が隔ちます、事業の友政治の友は友として油斷が出来ませぬ、學問の友は始終互に凌過せよふと思ふ心がありますから何んとかく親みが薄い、私は念佛の友を得て初めて人の貴い難いものであると云ふ事を知りました。曩に擧げました數種の友は念佛の友に比し著しい差があります、私は受け難き人身を受け、遇ひ難き聖世に生れ念佛の友を得て貴き光陰を送り得ることを感謝します。

私は過去二十年東京、大阪、京都、奈良、三重、静岡、長野、新潟、岐阜、愛知の三府七縣に住居し各種の人と交際しましたが葬儀の際を別として友の祖先を祭れる佛壇に參拜したことはありませなんだ、光明會主義に入信以來念佛の友の家に

きては佛壇を開き友の家族と共に念佛するとき初めて眞の友の味ひを知りました。四日市の友など佐藤氏と何んとかく遇ひ度しなご外の友に比べて懷みを覺ゆるなご互に語て居ます。念佛三昧を王三昧と云ふよりすれば念佛の友は王友と云ふも過言ではありますまいか。

## 念佛と家政

念佛者は起居動作に自ら規律が生じて來ます、従て暴飲、暴食、夜ふかし、朝寝などがなくなり、家族に對しやさしく、隣保にも、來客にも穩かに交際する様知らず知らずに進みます、倫理道德の規範に制せられて道を踏むものは曾子の如き人として戦々競々薄氷を踏むが如く、深淵に臨むが如く今に於て免るゝを得る哉小子との言を發せしむるの悲慘を見る私共の如き性質堅實に出來て居るものは到底倫理、道德の規範を守るの自制力なく敗徳、破廉恥の没分曉漢に終るの止むなき情けなき者が朝夕(行住座臥)念佛することに依りて漸次身意柔軟に傾く利益を得るのは光明主義の念佛の現世利益として特記すべきことと思ひま

す、一般に念佛者の家政は堅實にして投機事業などに手を出す者が尠なく平和なる生活を營む感があります。偶例外はなきにしもあらざるも概して念佛者には暴虎馮河はやりませぬ。

## 高聲念佛十徳

賢首の諸乘法數を拜見しますると高聲念佛の次の十徳が數へてあります。

- 一、能く睡眠を排す
- 二、天魔恐怖す
- 三、聲十方に偏ねし
- 四、三途の苦を思ひ
- 五、外聲入らず
- 六、勇猛精進
- 七、諸佛歡喜
- 八、念心不散
- 九、三昧現前
- 一〇、往生淨土

私供には能く分りませぬか○點を附したものは現世利益ではありますまいか人は睡てよくないときに眠れば夫れ丈の物質的若しくは肉體的に損失を招くものである、睡魔を驅る爲めには茗茶其他の方法もありませう、歌を歌てもよいと云ふもありませうが詩吟其他の聲樂的のものは拍子若しくは節曲しか下手とか聲が悪いと面白くない味噌桶の蓋をしたかなとやられると遂ひ止めねばならぬが

念佛は時處位を撰ばぬ、又相對を要せず一人でやれる、天魔恐怖などは穿ち天から魔が來て惡ひ事をするのを防ぐと云ふのみでなく人が惡を誘ひて傍き道に引入れ様とする場合に高唱念佛をして居れば遂ひに惡所に誘ふことを中止するのみならず或は靈化せられて善導に向ふなどを云ふたものではありますまいか、家は人聲がしないと何んとなふ寂みしい、念佛の聲、木魚の音などして居れば道行く人も菩提心を起させ、夜道する人など何程氣強からしむるか知れませぬ、法然上人の念佛に化せられたる強盜耳四郎は昔にのみありしに限らず梁上の君子を靈化し得れば其功德豈來世ならんや、外聲入らざるは瞋恚を起さざらしめ、諸佛歡喜は敢て肉眼に見ぬ法報化の諸佛のみならず、現在佛門に入りて活動せる未知の入道者をして意味して居るのではあるまいか、念心不散は消極的、三昧現前は積極的に私供の眼を休めて新しき生命に進み得る修養の利益ではあるまいか、些か私の心付きたことを綴りて御參考に供しましたたが皆様には私供より一層御實感が御ありでせうから來世

の佛果を樂ふのみならず現世利益の實例を御示し被下ませんでせうか。  
附記大垣光明會の桑原様は念佛入信者に限り念佛にて病氣治療せらるゝ由黒宮平八氏の御息が御重病でありましたが桑原氏によりて遂に全快せられました由之れ等は特別の例であるが、津島町鍵清吳服店の店員××と云ふ方は念佛入信後御主人得意の信用が一層厚い様であります、念佛者は氏に限らず世人の信用が厚いと云ふ事はいひ得るよふであるが皆様の御考へは如何で御座いますふ。

## 如來の大力

善 之 進

如來の大力ましますば宇宙の秩序は如何にあらん、我れも宇宙の一分子、此御恵みによりてこそ足をはこび手を上下することも得るなり。  
人は多く無智にして此大力の恩恵によりて生き

働きつゝ有ることを知らない。

如來の御力大悲の御光が今現に我が此の肉體の上に照り輝いてましますことを深く感ず然るに吾人は此御めぐみ被下つゝ有る此の賜を如何に取扱ふべきか如來の使命を如何に果すべきか。

我等は惡き個性と習慣とを爲めに正しく扱はずして常に無駄使ひしつゝ有ることを痛感する。

生命の流れは進展して一分間も停止しない流れ流れて止む時がない。進化に退化に向上にだらくに春夏秋冬柳は緑に花は紅にくりかへしくりかへし一切にねんごろに修養の糧として教へ給ふにもかゝらず實に是ぞと氣附ものは少い。

願くば如來よ親様ようぞ我れをして力を得せしめ給へ願くば一切をして此の安住の甘露を味識せしめ給へ一切に自覺あらしめ給へ今ぞ愈々深く感ずることを得たる如來の慈光を。死も生も我が思ふまゝにはならぬ病氣も健康も其まゝが如來の慈悲の恩寵の中である。

今此まゝに死するとも人生の目的の大部は達して居る、我れも又無量壽の生命を確得したるを悦ぶ

慈悲と言ふ意志は如來の生命である此の命がたとへ其量は少量なりと雖も此の我れの上に顯現し給ひつゝあることを悦ぶ。

如來の大力のましますば如何でか生死をはなれ得ん生れ難き人生として生れ遇ひ難き佛法に遇ふことを得たり嗚呼忝ない。

昨ばん法悦に満されて高崎から歸つて來た、食事をした時十一時過であつた、一寸胃の爲にもよいと思つて筆を取つて二三枚書いてねる時に二時であつた。ふとねがへりを打ちながら南無阿彌陀佛と云つた、其聲で目がさめた。けれども肉の私しは一方にねむいとさゝやくを覺へ一方には今日私にはたらいて被下れます如來の力を如何に應用致すべきかを思い、どうぞ如來様よと心に念じ南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛とくりかへした。昨日の私は死に今日の私となつて居る、先づ起出で、心ゆく計り念佛せんと床をはなれ一應室内のさうじをした五時も打つたから勇んで禮拜儀をあげ御念佛を申した。(十三、四、二八)



北越より

原吉郎

此手紙も去八日に書き始めたのでありましたが一寸他用出来差支が生じて駄目になり夫より毎日「差上度と思ひつゝ遂今日迄延びのびになりまして誠に申譯がありません、平生の怠慢と放縱と無慚無愧と無智とに付ては如何に御叱りを受けても御笑ひになりまして是れが眞實私の生温き目下の生活状態でありますから致方ありません。

回顧すれば私の父は今より五拾壹年前私の胎内にある間に年齢廿四才を一期として此世を去られました、其後五拾日目に私は人として生れました、母は當時拾八才而かも私一人之爲めに六拾八才の生涯を犠牲にして健闘されました、幸當時祖父母が健在せられまして私は温き慈愛に包まれつゝ幸福な生活をおくりましたが心の奥底に何んだか物足らぬ氣が致しました、祖父は今より三十七年前私の十五才の秋、祖母は十四年前に物故せられました。

した、極樂寺靜譽上人の熱心なる信者たりし祖母の感化を受けて幼少の頃より聊か求道心はありました。十五才の頃は今より見れば殆んど否全く空想に近き誓願をも起したのでありました。然るに當時大人格者に遭ふの機會もなく祖父亡き後は境遇の爲めと年少にて未だ思想の熱成せざりしとの爲めに内には聊かの求道心はありながら外は常に世間的の事物を追求したのであります、其間嚴格なる監督者たる祖父を失ひし私は祖母及母の大愛に甘ひつゝ自然我が儘放縱等の惡習慣も付いたのであります、而して前途を空想しつゝ現實の遙か之れに伴はざるを想ふて常に煩悶苦惱等に自ら斯の生を斷たんかとも思ふた事もありました。此際私の決心を翻させしめしものは一に母の愛でありました。こんな有様で常々安定を得ざる心の持主たる私は學業も中等教育の外専門教育は半途にして捨てざるを得ませんでした。其後丁年を過ぎて社會の實際場裡に立つに至りまして不相變同様の不安の精神状態と時としては熱烈眞摯なる又時としては放縱の生活を續けました。

其間自己の家業を始め地方公共の事業兵役の義務等にも服し相當の成功もし又失敗も致しました。十二三年前迄は如斯生活を繼續致しました、功績の上に於て又價値の點に於ては如何あろうとも兎に角相當世間的には花々敷時代もあつたのであります。

當時共に轡を併べて互に相馳せ迎へし同僚中には政界に至つては一黨の幹部となれる者あり、軍人にては將官となれる者あり、文官にては勅任官たる者あり、實業界に至つては數百萬の資財を天下有用之事業家たる者あり、有名文士あり、又た一面には失敗せる者あり、死亡せる者あり、予の如き碌々たる舊阿蒙もあり、可々。廿年の歲月は人をして種々に變化せしむるものなるを今更ら痛切に感ずる次第であります。

即ち地方村、郡、縣等の議員にもなり、或る時は當縣會之議長(當時私は副議長)席に付て大に縣政の爲めに氣を吐いた事もありました。其他公共團體の役員ともなり、會社銀行等の重役ともなり又た日露戰爭には從軍貳ケ年無事凱旋し後殊勲者の

恩遇をも受くる事となりました、官位も一年志願兵としては終局の處迄昇進せしめられました。當時は相當得意でもあり元氣もあり前途に大なる抱負をも持つて居たのでありました。然るに私の精神状態は現實と理想との懸隔甚しく事志と違ふの大なるを感じ益々苦悶したのであります、依つて暫時方針を換へて世間の事に遠ざかり自己内容の充實を計らんと思ふ矢先明治四十四年十一月當地の大火に類焼の厄に遭ひ住宅店舗は勿論醸造倉庫貳棟を失ひ一家全滅續て予の重役として名義を出し置ける某無限責任會社の破綻より解散となりて殆んど全財産を提供するの不得已事となり其他内外共に豫想以上の災厄不幸頻發、手も足も出ざる状態に陥りました。此秋は實に精神的にも物質的にも全く行き詰つたのであります、前途を眺むれば黑暗中螢火の如き一條の光明をも認むる事は出来なかつたのであります。是は實に明治四十四年より大正三年迄の私の境遇であつたのであります。(續)

## 吾朋便り

▽四日市 中野新兵衛様より。

御上人、上京中は奥様や神谷様にも大變御世話になりました。昨朝無事に歸宅致しました。夜に入り姉

故に私の初志大仁堂の治療してゐる事さへ許されぬ事にせられて、附添人の安神を興へる爲めに病人が附合つて歸らねばならぬと言ふ如き面白い現象が現はれたのであります。

へ御渡の御手紙幾度か〱拜讀いたしまして讀めば讀むほど有難う存じました。有爲と無爲とを兩手に眺め生死一枚の宇宙身は轉々と變れば變るほど眞善美はいやが上

實に健弱何れにありやと思ふ時病が、今や念佛申さんとして申すことのできない此の苦しい音聲が世の中に私一人丈けであれば幸いで

に光を増し強く私等に轟きます。東京へ行つて博士の診斷を煩はしても此の病者が今日起居自由にな

身必しも弱にあらざる事を感じらぬやうになるかも知れぬと思へば變れば變るほど眞善美はいやが上

しうることは實に醫學上より見、經驗上よりして奇蹟と言ふべく、生理的に見る時は一時半日も油斷

身必しも弱にあらざる事を感じらぬやうになるかも知れぬと思へば變れば變るほど眞善美はいやが上

出來る者にあらず等と、附添人朋友等をアット言はして仕舞ました

佛させて頂いたのは大正九年五月から灯の見え出す夕方はほんどう

▽大 阪 米田傳司様より。

冬衣を脱ぎすてゝすつかり解放せ

に静かな心に歸ります、何故かこ

五月號「眞生」發送の時從來用ひ

の頃になるとよけいに御上人がな

なかつた包裝紙を用ひました爲

つかしく思はれてなりません、一

めに中には脱落して本だけが二

會社では橋本君と閑あるごに御

三裸で舞ひもどりました、讀者

上人の思出を話合つては喜こんで

すがお知らせ下さい。

日々の仕事を楽しくつづけてゐま

諸兄姉の方で未着の方は恐縮で

す云々

すがお知らせ下さい。

▽東京の美和子より

初夏の新緑がグン／＼とその精

今日は山崎様も午前中にお出かけ

力を伸ばして居ります庭先きの

になりましたので良子ちやまを抱

八ツ手の葉私が等の手足をあざ

きながら暫時御念佛申ましたらど

笑つて居る様です、伸び行く魂

うしたものかしきりにあなたが戀

の深刻さを思はさるゝのは新緑

しくいろ／＼の事が思出されて涙

の時ばかりです。

がこぼれてなりません。

二人の子の阿父さんになつて信

良子を片手に書いてる自分がかう

心深い奥様と獨自の世界を掘り

申して眼を冥つて靜になると過現

抜いて來た尅兄はその歩みに一

未三世がハツキリ見える様で自分

層深さを思はせて來た。

のやうではない氣分で御座います

◆室は今ニギヤカです濱の山崎さ

平さんのでも臺所から一寸つゝか

んが宗教學を研究しながら時々

「有漏地より無漏地にかへる一休

洋服掛けで發送のお手傳ひ(顯)

けて神谷さんの所へ「義郎さん」と

言つて行きますよ云々

み雨ふらばふれ風吹かば吹け」唯

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

言つて行きますよ云々

口神戸

鶴田昌造様より

眞心からありかたく御禮申上げますと申より外御禮の申上やうも座

いませぬ。未だかつて一同があれ

程までに感激に充ちた尊い有難い

御別時をさせていただいた事が御

座いません。一同は心から御禮申

し合ふて居ります。御別れいたし

ますのはさびしいのであります。か

此の秋には又御出で下さることの

樂さに心は充ちて何ともいへぬ悦

びがありました。一同に代り深く

感謝いたします。

口東京

土屋觀道より

今朝(五月三十一日)無事一月ぶりに

歸京しました。静に道友の方々

を心に思い浮べては上なき法の友

として共俱に進まんことを心か

ら念願して止みません。何故にこ

んなに心から眞に皆様が戀いので

せう。過し昔の一人々が皆謂知

れぬなつかしさです。

寄贈並誌代拂込芳名

寄贈の部

○金五圓恒村京八様尾上隆治

様豊田省三様

○金參圓百々治之助様

○金貳圓小幡爲之助様梶川き

く様

誌代の部

○金壹圓飯ヶ谷保様恒川薫一

様淺野不全様指田常子様松

本昇様松平哲雄様小澤照山

様井上ハル様富野トク様山

上智導様大寶寺様宗大生杉

田様井上寛明様牧野演空様

藤井實應様山田辨信様藤野

立英様松本賢定様田中芳全

様石橋喜代治様瀧川徳惠様

○金貳圓氏川徹俊様

### 唐澤の三昧會

今年は七月二十三日より二十八日

まで七日間開くことになりました。

熱心に心からやりませう。

今回こそは例年にもまして、眞に

心から念佛したいと存じます。期

日は先方の都合もありまして、右

の期日に定めました。

定価一部十錢 半年六十錢 一年一圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋觀道

發行人 眞生

發行所 眞生

東京市芝區芝公園第十四號地九番

印刷人 三井清次

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 玄々堂印刷所